



臨床心理学の源流に遡りながら、  
**人類のこの新時代に**  
臨床心理(学)の営みを根底から見直し、  
**新しい動き方を試みる**

日本臨床心理学会 第57回大会

日時 2021 12/5(日)▶11(土) オンライン 

わたしたちは今なんとも奇妙な時を、なんとも不確実な世界を、今までにない形で生きています。戦争や革命の最中でもないのに、そして科学技術に対する信頼はかつてないほど強固なものがあるのに、すぐ先のことさえわかりません。\* 1

確かなことは、今（生物としての）ヒト、（心理社会的存在としての）人間、そして（人の集まりとしての）集団と組織が、根底から問われているということです。そして、その問いを、流さずにしっかりと受け止めて行くと——独り静かに心の中でではなく、人と人との間で言葉を交わしながら問い続けると——自分自身はもちろん自分が属する家族をはじめとする集団や組織には、これまでとはかなり違った展開が始まるだろうということです。

今わたしたちが直面している未曾有の事態は、自然に対する人間のひどい関わり方がもたらしたものです。自然を搾取しながら、ひたすら突き進んできた人間／個人中心主義と商品の生産／消費中心主義に色づけられた「近・現代なるもの」が、ついに地球全体を覆い尽くすことを可能にした経済のグローバル化の帰結だ\* 2と言い換えてもいいと思います。

新型コロナウイルスのパンデミックは、多分しばらくしたら（少なくとも一時的には）収束するでしょう。しかし、もはやわたしたちの生き方は元のように戻してはなりません。また、元と同じようにはなれないでしょう。同時にグローバル化の道はもはや引き返すことが出来ないほど進展してしまっていることも確かです。こうして、全てがこの先どうなるかわからない時、一体どうしたらいいのでしょうか。

わたしたちは（特に日本人は、と言ってもいいでしょう）「既成事実」なるものに限りなく弱い集団です。そして、また「大勢がそっちの方に流れているなら、もうどうしようもない、それに身を任せるしかない」といつも言ってきました。それが生き延びる唯一の方法のように思い込んでしまっただけです。\* 3

しかし「事実」とは何でしょう？ そして「大勢」とは？ 確かなことは言えませんが、確かなことはないということだけは確かです。「事実」も「大勢」も、絶対動かないものではないということです。それらは、ここに至るまでの流れを含んでいる様々なコトをどう理解するか。そして、これから何を望むか。それらによって、初めてコトが分かり、事実はまとまった意味のあるものとして現れます。そして、そこから、今この場に自分がどう臨むかによっても状況は動いて行くはずで

つまり、コトはいくらでも（再）構成されるということです。なぜなら関係の中で集団の中で生きる人は、意味のある世界（つまり物語り）なしでは、生きられないからです。そして確かに、わたしたちは過去から今に連なる特定の物語りを生きています。

しかし、ここで問うべきは、わたしたちは他者を避けてばかりの生き方をしようとしていないか、ということ。そもそもわたしたちは、自分とは異質な他者の存在を認めず「これが当然で、これしかない」と思わせる小さな世界の中に閉じ込められてはいなかったかということです。今回のパンデミックは、そうしたことを実に見事にあらわにしてくれました。

こうした様々な「問い」を、わたしたちは適当に流さず、しっかりと問い続けてみたいと思います。実は、それこそは「近・現代なるもの」の病いへの対処・対応法として始まったと言える「臨床心理（学）」をも、その根底から見直すことにつながります。

臨床心理学はつい最近まで、科学を自称していましたが、実は最初から矛盾だらけでツギハギだらけのものです。考えてみれば、生物の世界と結構似ているのではないのでしょうか。それだからこそ、と言いましょ。この臨床心理（学）の世界は、次の世代（あるいは時代）への希望になるかもしれないと思うのです。ただし、問いを続ける限りです。そして、今の特別の事態は、臨床心理（学）の営みを、その枠から土台から、根底から問い直し、考え直すことができる絶好の機会ではないかと思うのです。

そこで、今回の大会には、これまでの常識に囚われないやり方を提案します。わたしたち日臨心（日本臨床心理学会）は、学術団体ではありますが、当事者から学ぶことを掲げ、臨床心理の専門家だけの団体にならないようにしてきました。これからは、その考えをさらに大胆に進め、臨床心理の世界を最大限に広げたいと思います。この大会はその大きな第一歩です。

昨年の大会は横須賀で予定されていましたが、パンデミックで中止となりました。今回のプログラムでは、その時に用意されていたものをやり抜きたいと思っていましたし、今回の中に含めたいと考えていました。しかし、この特別な機会を大いに生かすために、考えを大きく変えました。

期間を1週間として、リアルで集まることを前提としたプログラムとは全く別のやり方で行うことにします。日臨心という組織そのものにとっても、新しい実験的取り組みです。それは、OST（オープン・スペース・テクノロジー）の考え方を取り入れた＜誰でも望めば、問題提起者になれる、主催者・主人公になれる＞という発想で、全てを企てるというものです。\* 4

それによって、閉ざされているそれぞれの専門の分野（世界）を開き、専門家の枠を取り払って、これまでにはなかった交流を始めたいと思います。「越境する対話」を目指すということです。既成の枠を超え、多様性を生かして、問題と課題を様々な角度から見直したいということです。そうして、人と人との、人と集団との関係、人と組織との、集団と組織との関係について、これまでとは大きく違うあり方を、発生・発現さ

せることができる「場」と「間」を用意したいと思います。

そこで交差・交流を通して、自然搾取の人間／个人中心主義や商品の生産／消費中心主義とは別のあり方が見えて来ることを、そして模索・試行を通して、新しい動き・新しい生き方が、この危機の中で少しでも立ち現われんことを、切に願っています。

以下は本文の字句の注釈や解説でもありますが、この草稿を書いている中で、これを読んだ大会準備委員からのコメントなどを生かして、付け加えたものです。

\*1 と言うよりも「大戦ではなくも、世界各地での局地戦は絶えず、そこに加わる大国の介入で実に悲惨な状態が続いていることはよく知られていますし、科学技術への信頼についても、無批判の傾倒・讃美と言うべきで、その副作用への考察・対処の怠慢こそを考える必要がある」と語るべきかもしれません。

\*2 グローバル化は、とりわけ新自由主義経済のグローバル化と明言した方がコトがはっきりとするかもしれません。

\*3 既成事実を突きつけられ、その場の空気によって支配されて、動きが全く取れなくなるということは、昔も今も変わっていません。この案内文の草稿を書いていた時が、パンデミックの真っ最中の東京オリンピック 2020 の開催に関して、批判的な意見がメディアでも取り上げられつつあった時でした。このことに関して、一貫して五輪の東京開催に反対していた久米宏が発していた言葉があります。誰もそんなことになるとは思っていなかった太平洋戦争開戦に至る時と同じなのだ。

——それと「今さら反対してもしょうがない」ね。その世論が先の大戦を引き起こしたことを皆、忘れてるんですよ。「もう反対するには遅すぎる」という考え方は非常に危険です。日本人のその発想が、どれだけ道を誤らせてきたか。

日刊ゲンダイ 7.31 公開のインタビュー記事 久米宏氏『日本人は“1億総オリンピック病”に蝕まれている』  
<http://www.nikkan-gendai.com/articles/view/news/210304>

\*4 オープン・スペース・テクノロジー (OST) の考え方は、日臨心の基本的な発想に重なっており、その理解と応用は、日臨心の新しい展開に繋がると様々な試みがなされて来ています。すでに第 55 回大会でも、一部その精神に基づいて運営されましたし、さらにもっと前、2011 年大阪市立大学での大会の頃から、ワークショップなども開かれています。

OST については、大会の前に、全体に（あるいは関心のある会員には個別に必要な）情報を提供して行くつもりです。とりあえずは別紙の簡単な説明を参考にしてください。

滝野功久(いさく) 大会実行委員会代表

